

=====

GCOE NewsLetter

[No.46 2011/7/28]

平成23年度第1回gCOE論文賞の募集について

国際研究集会の開催について（再掲）

次回のオープンレクチャーについて

「テキスト布置解釈学原論」の要約

「テキスト布置解釈学各論」の要約

gCOE講演会の要約

第39回オープンレクチャーの要約

gCOE研究員ブリーフィング要約

=====

■ 平成23年度第1回gCOE論文賞の募集について

名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラム『テキスト布置の解釈学的研究と教育』では、論文を募り、「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2012年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。

受付期間は2011年8月29日（月）から9月5日（月）16：30までです。

なお募集要項、執筆要項、申込用紙は以下GCOEのWebページを参照してください。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/20111coe-1.html>

■ 国際研究集会の開催について

第12回国際研究集会が以下の日時に開催されます。

「歴史におけるテキスト布置」 Configuration du texte en histoire

日程：2011年9月1日（木）～2日（金）

場所：名古屋大学（野依記念学術交流館）

使用言語：英語・フランス語（同時通訳付）

■ 次回のオープンレクチャーについて

次回のオープンレクチャーは9月に開催予定です。
決定次第、下記GCOEのWebページでお知らせします。
<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/activity/activity03/>

■ 「テキスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

KUGINUKI Toru (2011年6月23、30日)

The Genealogy of Kyoyo-ism in Modern Japanese Language Studies

Kyoyo-ism was individual action that had been profoundly influenced the progress spirits of young intellectuals from beginning of 20th century to the eighties era in Japan. The notion of Kyoyo-ism had been derived from “Bildungs roman” of German literature. But there is no suitable equivalent in English to Japanese term Kyoyosyugi (教養主義). Therefore I used in this lecture, the original term “Kyoyo-ism”.

I have noticed the studies of Yamada Yoshio (山田孝雄), Arisaka Hideyo (有坂秀世), Okuda Yasuo (奥田靖雄). They have achieved the individual works in modern Japanese linguistics. I found the influences in their achievements from outside of western linguistics. That is metaphysics of Kant, for Yamada, phenomenology of Husserl, for Tokieda and Arisaka, Marxian economics for Okuda. They have backgrounds of different ages and ideologies. German metaphysics and Marxism had formed the current that had supposed students' education from second half of Meiji period to first half of Showa period. That is the Kyoyo-ism which had supported a lot for radical questions of young intellectuals. They say “What are existences of things?”, “How do we recognize of existences of things?”, “How do we solve social contradiction?”, “How do the solutions of social contradictions concern with our studies?”

Yamada, Tokieda, Arisaka authorized their traditional studies based on western philosophy for opposing to new western linguistic theory. Okuda authorized his theory by Marxism for opposing to the school grammar of establishment and academic Japanese language studies indulging to philological history of Japanese. Persuasion of his theory had been based on confidence about existences of words and individual demonstration. It is a long time since peoples say Kyoyo-ism ended. This is a same time

for global decline of Marxism and communist states. When we estimate the Kyokaken grammarians (教科研文法派) in whom Okuda had led, about the viewpoint of historical Japanese language studies, we can judge them the last challengers of Japanese language studies based on Kyoyo-ism. In addition to exit of Marxism, Kyoyo-ism in modern Japan faded out. In other words, we should live on the midst of lonely special information. However the linguistics in Europe had leaved German characterized culture since F.de Saussure and H. Sweet. From the time to now, in western linguistics, essential studies on origin of language have faded out. These facts have brought conspicuously elaborate descriptions to linguistics. However such technique-oriented descriptions often impressed people with strange looking emptiness.

■ 「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

● テキスト布置解釈学各論 IV

宮地 朝子、クレール・フォヴェルグ、重見 晋也（2011年7月7, 14日）

授業担当者によるケーススタディの提示を踏まえ、受講生を含む全体で討論を行った。議論はパラテキストの規定や布置構造における位置づけの再検討から、解釈という営みとの関係性に展開し、文書テキストを対象としない分野での援用可能性にも及んで以下のような整理に至った。

パラテキストは、①テキストを前提とし、その本文以外の構成要素や外形的特徴として把握され、②テキストと同じ空間において（例えば書物テキストであれば書誌的要素として）テキストの性質（ジャンルなど）を規定し方向付けると同時に、③（テキストの内部要素だからこそ）テキストとテキストの外界を結ぶ物理的なインターフェイスとして機能するものと整理できる。この見方は、各の側面、例えば③に注目して時空間を共にしない副次的テキスト（対談、批評者宛ての手紙など）をパラテキストとする分析を妨げないが、②を典型とすることで、コンテキストやメタテキストといった布置構造上の他の要素との対立も、個別の有用性も明晰化する。

パラテキストは、書誌的要素がジャンルの明示と差別化に直結すると同時に出版を含むメディアやその技術の進展と不可分であるように、社会的あるいは文化的・歴史的に条件付けられ、テキスト解釈の方向付けに大きく関与する。分析対象＝テキストである以上、原理的にはパラテキストなしの分析解釈も可能であるが、解釈者・分析者や関連テキスト、公共や個々の読者といった外界と、テキストを結ぶ“関”は不可避ともいえる。

テキストの主体による操作性の大きな要素（筆名等）もある一方、その成否は解釈者の先入見や参照情報、コンテキストなどに左右される。また、中心的テキストが解釈者・分析者の問題関心によって決定づけられる故に、一般にはパラテキストと見なされる要素（例えば、欄外の書き入れや映画の字幕等）をテキストとして分析することも可能であり、その場合、本文テキストがその解釈を方向付け外界との関となるパラテキストともなりうる。

パラテキストは、テキストの解釈や分析の動的な有り様を把握説明する重要な一観点となる。以上のような整理と観点としての明示化は、解釈学モデルの進展にも寄与しうる。

● テキスト布置解釈学各論 V

高橋 亨（2011年6月22, 29日、7月6, 13日）

高橋亨『源氏物語の詩学—かな物語の生成と心的遠近法』（名古屋大学出版会）の「序論」を素材として、『古今集』かな序を中心とした「言葉」生成の文学観とその意義について論じまた討議した。まず、1970年代以降の「テキスト論」の理論的な背景を概説し、その中で、論者が「テキスト引用関連」を主として『源氏物語』など平安朝日本文学研究を展開してきたことを説明した。次いで、コトバを「言葉」と表記したり「言の葉」と歌語表現することが平安朝以後に始まり、その「種」「葉」「花」「実」など植物生成をめぐる喩が日本の伝統的な文学論および文化論を形成してきたことについて、具体例に則して論じた。ことに「述志」の文学としての中国における文学観との共通性と差異については、中国人留学生を含む大学院生たちとの討論が有意義であった。

また、ウィーン工芸博物館（MAK）蔵で新出の『源氏物語絵詞画帖』については、その若菜上・下巻の場面選択と詞書の特異性について、他の多くの詞書を伴った源氏絵資料との比較検討資料に基づいて、その文化コンテキストを中心にしたテキスト論の例として論じた。これはまた、導入において用いた源氏絵と『源氏物語』の「後宮」をめぐる国際比較の視座とも対応している。

● テキスト布置解釈学各論 VI

ブライアン・カレン（2011年4月19, 26日、5月10, 17, 24, 31日、6月7, 14, 21, 28日、7月5, 12, 19日）

Graduate students face a variety of writing tasks as they work towards their chosen

degrees. Naturally, these tasks will vary from one degree program to another. They are however, similar in two respects. First, the tasks become progressively more complex and demanding the further you go in the program. Second (with few exceptions), they need to be written “academically.” This course focuses on the writing tasks that may be required in a graduate career.

The chosen textbook is “Academic Writing for Graduate Students” by John M. Swales and Christine B. Feak, both highly respected experts in the field of academic writing. While the textbook is not specifically aimed at non-native speakers of English, the authors’ long experience in the field of English for Academic Purposes is well demonstrated in the book by their clear examples and careful scaffolding of language that is useful for both the native speaker and the non-native speaker reader.

The course follows a task-based methodology in achieving the following goals:

- Understanding the intended audience, the purpose of the paper, and academic genres.
- Engaging in analytic group discussion
- Genre consciousness-raising
- Writing summaries and critiques
- Language focus sections that address linguistic elements as they affect the wider rhetorical objectives
- Help students position themselves as junior scholars in their academic communities
- Develop goal-setting skills
- Provide a rationale and a forum for writing academic papers

The end of semester project involved writing a 5,000 word paper related to the theme of the students’ own PhD research. All of the students were able to successfully complete this challenging task, and it allowed them to explore their own research in an unthreatening environment. Students chose to utilize this assignment in a number of ways. One of the students used the assignment to explore a particular area of her future PhD analysis. Another student utilized it to write an introduction to his entire PhD thesis and thus to help him organize the overall structure of the work. In both cases, the students reported that the assignment helped them to focus their thoughts greatly and to make considerable progress in their overall research projects.

In addition to the writing assignments and exercises, the students also engaged in presentations and goal-setting exercises. During the semester, each student had four

chances to make a presentation, culminating in the final presentation on the same topic as their paper.

■ gCOE 講演会の要約

2011年7月7日(木) 14:00~15:30、文学研究科大会議室(使用言語:日本語)
にて

講演者: 宮川 繁 教授 (MIT)

題目: 歴史と画像: Visualizing Cultures

"Visualizing Cultures"は、従来文字資料に依拠した議論を主体として展開してきた歴史学に対し、絵画や写真のような視覚資料の分析を中心に据えたアプローチを提示しようとする本格的で大規模な試みであり、今回の講演者である宮川繁教授と、ピューリッツァー賞を受賞した著書『敗北を抱きしめて』等で知られる歴史学者、ジョン・W・ダワー教授が主導する共同プロジェクトとして、2002年マサチューセッツ工科大学に於いて開始された。以来、同プロジェクトは現在に至るまで継続的な発展を遂げてきており、より多くの美術館等との提携を進めることで利用可能な画像データもますます充実したものとなっている。また、画像と文字情報の有機的な連携を可能とするウェブの特長を最大限に利用し、体系的に閲覧可能な形で公表されているその成果の蓄積は、今日では参照が容易で有用な資料として、多くの機関に於いて研究・教育目的で広く利用されるに至っている。

本講演では、中心人物の一人である宮川教授本人から、同プロジェクトの目的や理念、遂行上の方針や最新の進捗状況等についての概略が語られた他、異文化間の接触や近代アジア史を中心的な対象分野とすることから、ペリー来航に際して日本人及びアメリカ人によって描かれた絵画等を実際に幾つか取り上げ、そこから読み取り得ることの解説を通して、この日米双方にとって異文化との大いなる出会いだったであろう事件を当時の両国の人々が如何に捉えていたか、様々な手掛かりが得られることが示された。また、2年間に亙った日露戦争に関する報道を観察すると、初年度の記事には専ら絵画が添えられていたものが、次年度には殆ど写真に置き換わっており、このことが、絵画から写真へという報道に於ける使用メディアの推移が、この時期にしかも急速に進んだことを反映しているとの興味深い指摘も為された。

■ 第 39 回オープンレクチャーの要約

2011 年 7 月 20 日（水）18:00～19:30、名古屋国際センタービル 15 階グローバル COE オフィスにて

講演者： 釘貫 亨 教授（名古屋大学大学院文学研究科・日本語学）

題目： 仮名遣いと古代日本語

仮名遣いは、鎌倉時代以来「定家仮名遣い」として堂上系歌学における絶対的規範として近世中頃まで伝承されたが、万葉集の注釈家である大坂の契沖が定家仮名遣いの伝承と自ら経験した上代の仮名用法の齟齬に苦慮し、『和字正濫鈔』（1695）を著して「天曆以往」の上代仮名を基準にした新仮名遣いの提案をなした。その際、契沖は従来のいろは歌による説明に変えて「五十音図」をその枠組みとした。その結果、仮名遣いで問題が生ずる「いひみ」「えへゑ」「をほお」の仮名群が音図に規則的に分布することが判明し、仮名遣いとはつづり字の規範問題だけでなく、古代日本語の音声の実態を反映する問題であるという歴史的本質に関する推測が浮かび上がった。仮名遣いは、「仮名遣い論」として古代日本語音声の再建という学理的問題に展開した。音韻学者の論争の中心は五十音図のア行ヤ行ワ行の再建にあった。特にヤ行とワ行は「ヤ■ユ■ヨ」「ワキ■エヲ」のような独特のゆがみを形成しているので、該当の仮名のない位置の背後にも音声が存在したのではないかという理論的仮説（喉音三行弁）をめぐって論争が交わされた。本居宣長は、『万葉集』の字余りの法則から古代語においてア行音が ai ue o のような単独母音であったという結論を得て、ヤ行音 ya yi yu ye yo ワ行音 wa wi wu we wo という合理的な音価推定に到達した。宣長の理論的予言に基づいて後に奥村栄実は、ヤ行「延 ye」の存在を論証した。

■ gCOE 研究員ブリーフィング要約

第 32 回ブリーフィング（2011 年 6 月 29 日）

内田 智秀 『叡知と運命』から見る『青い鳥』の幸福について

『青い鳥』（1908 年）創作前から、モーリス・メーテルランクは『叡知と運命』（1898 年）の中で幸福について論じていた。劇作家にとって幸福とは心の中で起る現象であり、さらに劇作家は知性よりも道徳を重んじ、そして運命が私たちに

襲いかかったとしても、幸福になろうとする希望を持つことが大切だと考えていた。構想手帳の『青い鳥』の執筆順序の分析から『叡知と運命』の実践の場として『青い鳥』を位置づけることが可能である。しかしそれでは主人公チルチルは叡知を得ただけで、彼の身の回りは何一つ変化していないことになる。ところが構想段階では、旅を終えたチルチルが現実世界で幸福を手にしたと思われる断片がある。病から回復した娘とチルチルが抱擁する構想の中に、突如未来のチルチルの息子が登場する。この抱擁と息子の登場は、幸福と恋愛という二つの主題を結びつける。この二人の愛は初版や最終版では沈黙の裡に含んでいると思われる。

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2011 年 8 月下旬を予定しています。

.....
GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.46

発行：GCOE 編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2011 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....